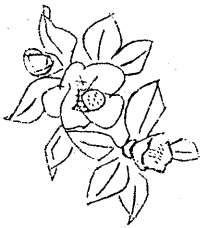


言象を否定しない事を指摘し、心無説は主観の無心によつて無執着を説きつゝも万物の空をいわない。即色説も色の相対性を強調するが相対性そのものは空性の理由にはならない。本無説は本無をたつとび全てを無に帰して言象を評価する意欲をもたぬものであると破斥するのである。

だがこゝで一つ彼が中論を引用して論を進めている物不遷論に於ける論理に於いて中論のそれと異つた理解をしている点が存する。即ち真諦は俗諦を根拠づけ、俗諦は真諦の仮設であるという理解に欠けるのである。やはり老荘に育つた彼は純粹に仏教の真意をつかむに至らなかつたのであろうか。しかしいずれにせよ彼の論理は從來の中国仏教界に対し老荘的無の思想と結び合つて理解されていた般若学を正し、中国仏教を仏教独自の教義顯示の方向へと大きく一步をふみ出さしめた意義は大きい。



「原始仏教に於ける縁起について」

名古屋隆真

宗教実践の理論の中心である縁起説は、三法印の上組織づけられている。この三法印即ち仏教真理に対する有情の心身のとるべき態度は人間仏陀によつて顯示されたのである。それは形而上学問題の否定であつて、無記説に見られる如き問に対する沈黙の内容が、仏教真理に対する有情の心身のとるべき態度を教えてくれるのである。それは即ち法の認識による事実の判断である。

和辻博士のいわれる真実の認識とは、この法の認識であつて、真理と受け取ることである。即ち自然的立場を止揚した本質直観の立場に立ち、実践的現実の如実相を見ることである。この現実の如実相を仏陀は、宗教的直観によつてみいだされたのであつて、無常なるものを無常とみられたのである。存在するものの法を無常だとみられたとき、すべての現象的存在は、苦であり、無我であると言ふ真理性を明らかにされ、更に縁起であると云

うことを明らかにされたのである。

一切法が無常であると述べている資料は、阿含、危柯耶をあげることが出来る。こゝでは一切法の真偽は問題とされず、無常なるものは無常だとみられている。それ故に無常の根拠は經典にも示めされていない。しかし無常の根拠をあえて追求するならば、縁起の故にと云うことが出来る。かくの如く、一切法が無常、苦、無我、縁起であると云うことの認識のみが唯一の関心事として、相依相待を説くものが一切法因縁生縁起である。即ち一切法に対する事実の判断を教えるものであつて、これを仏教真理の自覚と云うのである。

一切法に対する事実の判断こそが、有情の生存に関する事実の判断を可能とするのである。一切法に対する事実の判断を有情の生存即ち自己自身を中心として、なぜに生、老死の如き人間苦があるのか、いかにすれば滅することが出来るかを教えてくれるものが、有情数縁起なのである。即ち一切法のあるがままの状態を生活の上に具現させることである。これを仏教真理の具現と云うのである。十二縁起説は、この有情数縁起と一切法因縁生

縁起を一つのものとして、人間生存の眞の在り方を教えるものである。即ち人間生存の要素として、十二を代表させて人間苦の集起と販滅を論じるのであつて、無明、渴愛の有無が、人間苦の有無を規定すると説くのが中心である。

即ち十二縁起説は、主観としての識と名色の接觸により識が無明を内相とし、渴愛を外相として活動する時、取と云う形をとるのである。又この活動は行の働きがあつて、この行が生存としての有を成立せしめるのである。即ち「愛―取―有」は「無明―行」を展開したものである。「愛―取―有」は識によつて内容づけられるものであつて、生存の在り方は識の活動たる行に外ならない。識の活動は「名色、六処、誠」の三事重合により成立し、その重合する所に生じる精神作用として触が考えられ、触即ち接觸感覺により生じるのが受である。その受は愛を対象とするが故に「識―名色」の關係は「愛―受」の關係と意義を同一にしている。従つて渴愛滅は、無明滅であり、無明以下、生、老死の滅を意味する。即ち眞実の認識に外ならない。仏陀の生存を深く吟味してみるな

らは仏陀は、十二縁起説で云う無明、渴愛の滅をなしとげた生存をなされていたとみることが出来る。

又この十二縁起は四諦を内含している故に仏教真理を具現させるための八聖道実践の要求が積極的になされるのである。即ち八聖道実践を一口で云うならば、法の認識を意味すると思う。又それが理想としての解説を現実の生活の上に実現させることを可能とするのである。かくの如き解説は、心身の調和を得た二辺を離れた中道であつて正しい世界観、人世観を確立せしめた人間生存を云うのである。

「普賢菩薩行願讃の研究」

村 下 奎 全

行願讃には幸にしてネパール伝その他の梵本と共に、八〇六年空海によつて請来され、江戸時代慈雲尊者がこれを研究解説した日本伝本もあり、その近代の最初の研究は我が渡辺海旭ドクトルを以て始まる。渡辺氏はドイツのストラスブルグ大学留学中、本讃の総合的な研究を

行ないロイマン博士のドイツ訳を付して *Die Bhadracarī, eine probe buddhistisch-religiöser Lyrik, untersucht und herausgegeben* と題して一九二二年ライプティヒから出版した。而し残念なことに、この書は現在では希観書に属して容易に見ることができない。不十分なものではあるが私の本論巧に副論文として対照本を提出したのはこの間の事情によるのである。

行願讃は梵文の他にチベット訳 *npdags pa bzang po spyod pah smin lam gyi rgyal po* 漢訳五本があり、更にウイグル、西夏、コータン、蒙古語訳等がある。そして *Sankīdara* の *Sikshītsamaccaya* 中にはその第五五、五六の両偈が引用されており、楽邦文類にも引用があるのである。以ていかに本讃が広く行なわれたかを思うべしである。渡辺氏の後を受けて故泉芳環教授は本讃の研究に意を注いだがそれは幾多の論文として公表されており中に英訳 *The Hymn on the Life and Vows of Samantabhadra, with the Snt Text,*